ゼロの魔神

Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの魔神

【Ｎコード】
Ｎ８６０３Ｚ

【作者名】
Ｆｅ

【あらすじ】
かつて魔神ゼラと恐れられていた青年が神様の頼みからハルケギニアへと転生する。だが、その魔神が使い魔として召喚されてしまった！？この話はそんな魔神が織り成す少し変わった物語である！

第一話、神様の頼み（前書き）

いつかゼロ魔のＳＳを書いてみたいと思っていた自分がいました。

その願いがやっと叶いました！！

第一話、神様の頼み

『魔神』

それは災いをもたらす神、もしくは悪魔である。異教の神や、特に位が高く強力な悪魔を指して『魔神』と称する場合もある。

この話は、そんな魔神の少し変わった物語である。

～？ｓｉｄｅ～

とある書斎、青年が椅子に足を組みながら静かに目を瞑っていた。

「……グー……。」

「……そろそろ起きてくれんかの？」

そう、この青年はある老人に呼び出されたにも関わらず熟睡中であった。

「……あっ、待って…俺そこ感じや…すい……。」

「どんな夢見とんじゃ……。」

「…ん～？あぁ…悪い、ちょっとウトウトしてた。」

「明らかに夢の中で楽しんでおったがのぉ。」

かてぇ事言うなよ…、こちとら徹夜明けなんだぞ？

「お主は徹マンしただけじゃろう。」

「うっ…、知ってたのかよ。」

やっぱりこの爺さんには適わなねぇな……。

「それはさておき…お主に頼みたい「やだ。」……話ぐらい聞いてくれんかの？」

「…分かったよ、聞いてやるよ。」

まぁ、どうせ碌でもねぇ事だろうな……。

「単刀直入に申す、お主にはある世界へ行ってもらいたい。」

「……つまり転生しろってか？」

「左様。」

おいおいマジかよ…、転生すんの苦手なんだよなぁ。

この青年が最も苦手としているものは転生である。その理由は――――、

『仕事の中でいっっちばんめんどくさい！！』

確かに、天使や悪魔の間でも転生というものは良い仕事とはいえないのが現実であった。

「お主が嫌がる気持ちは分かる。しかしな……、」

老人はそう言いながら深刻そうな顔をしてこう告げた。

「そうせんとその世界は滅ぶ。」

「何…？」

滅ぶ……、あんまり良い響きではねぇな…。

「頼むその世界を救ってくれ、この通りじゃ……。」

老人が青年に対して深々と頭を下げる。

「……分かった、転生してやるよ。」

「…すまんな、いつも面倒をかける。」

「気にすんな、他でもないアンタの頼みだからな。」

そうだ、この爺さんの為なら転生なんて軽いもんだ。

「では、早速だがすぐに行ってもらうぞ。…それと、あまり力を出し過ぎるな。世界が壊れかねん。」

「あぁ任しとけ。」

俺が本気出しちまったら、天界や魔界でも無傷ではいられねーからな。

「んで、転生先は？」

「お主にはここに行ってもらう。」

老人が青年に書類を渡した。

「……ハルケギニア？」

「うむ、その世界も儂らと同様に魔法を使っている世界だ。しかし、魔法に頼り過ぎて６０００年経った今でも文明が一向に進歩せん。」

「６０００年？よく生きていられたな。……待てよ。」

いつになっても進歩しない文明…。もしや……、

「お主が考えておる通りじゃ、進歩せん文明は必ず滅びる。歴史が

そう物語っておる。」

「だが６０００年も保ち続けているんだぞ……何故だ？」

「……宗教じゃよ。その世界の人間の全ては一つの宗教しか信じておらん。」

成る程な…だがそれもいずれは……。

「狂信的な信者が何らかの行動を起こすだろうな。」

「うむ…。お主にはそれを最小限で構わん、食い止めてもらう。……頼んだぞ。」

「任しとけって、アンタは爪でも切りながら気長に待ちな。」

「そうしようかの…。ついでに花嫁でも探していけば良いだろう。」

「そうさせてもらうぜ。じゃあ行ってくんぜ…神様。」

「無事を祈っておるぞ……『魔神ゼラ』よ。」

魔神ゼラか……。そう自ら名乗らなくなったのはいつからだろうな…。

そう思いながらゼラは書斎から出て行った。

～ゼラｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～神ｓｉｄｅ～

「頼んだぞ魔神ゼラよ……。」

彼なら必ずやり遂げる、何せ儂が認めた男じゃからな。……だが何か言い忘れていたような。

「あっ、使い魔として召喚されるのを言い忘れておった……。」

魔神が使い魔になるとは……、あの男…怒るであろうな。

第一話、神様の頼み（後書き）

難しく書こうとしたら、わけ分かんなくなっちゃいました……。

第二話、魔神召喚（前書き）

それではどうぞ。

第二話、魔神召喚

『ハルケギニア』

そこはトリステイン王国・ガリア王国・帝政ゲルマニア・ロマリア皇国・アルビオン王国といくつかの小国が存在する大陸である。各国では魔法を使えるメイジが貴族とされ、支配階級となっている。

そんなトリステイン王国にあるトリステイン魔法学院では春の使い魔召喚の最中であった。

～ルイズｓｉｄｅ～

「何で？何でよ！？何で何も出て来ないの！！？」

ルイズが使い魔召喚の呪文を唱えれば、何故か爆発が起きる。

嘘よ……もしかして使い魔すらも召喚出来ないの！？

「ゼロのルイズは使い魔すらも召喚出来ないのかぁ！？」

「サモン・サーヴァントぐらいちゃんとやれよ！」

「僕…何だか疲れてきたよ、パトラッシュ……。」

何よ！みんなあたしを馬鹿にして！！

「アンタ達見てなさい！今からあたしが超絶凄い使い魔を召喚するんだから！！」

「無理すんなよー、どうせ失敗するんだから。」

「う～～～！！」

アッタマきた！絶対使い魔召喚させてやるわ！！

するとルイズは一度深呼吸をして杖をしっかりと握った。

「宇宙の果てのどこかにいる…わたしの僕よ。神聖で美しく！そし

て…強力な使い魔よ！私は心より求め訴えるわ！……我が導きに応えよっっ！！」

そう言いルイズが杖を振ったが、今度はひときわ大きい爆発が起きた。

「ゲホッゲホッ！また爆発かよ！！」

「そんな事より成功したのか？」

「ん？…おい何かいるぞ！」

ホント！？だとしたら召喚は成功だわ！！

「ちょっと砂埃で見えないな…、風で飛ばすか。」

一人の男子生徒らしき者が杖を振るうと、砂埃が風で飛ばされてゆき段々と姿を現した。

「さぁ！わたしの使い魔は！？」

お願い…、この際もう猫でもフクロウでも何でもいい。だから…召喚されてますように！

「おい…アレって……。」

「あぁそうだな…。」

「人だな、しかも平民。」

人？ＨＵＭＡＮ？嘘だわ…そんなのあり得ない……。

だが砂埃が晴れるにつれ、その姿が人間である事に気付く。

するとその人間がキョロキョロと辺りを見回しはじめる。

「アハハハ！マジかよルイズ！？」

「平民を召喚とか凄すぎ！」

「流石ゼロのルイズは違うなぁ！！」

「……。」

ルイズは周りの生徒からの罵倒を無視しながら、召喚した人間の方へ歩いて行く。

何であたしだけこんな目に遭わなくちゃいけないのよ？…というか……、

「あんた誰よ！！」

ルイズは自分の心の叫びを召喚した人間に言い放った。

～ルイズｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

「あんた誰よ！！」

何だよ人を見るなり怒鳴りやがって、……人じゃないけど。

「ちょっと聞いてんの！？」

「さっきからうっせーぞガキ。」

「ガ、ガキですってぇ～！」

ゼラとルイズが言い争っていると、紺色のローブを着た中年男性が近づく。

「まぁまぁ落ち着いてミス・ヴァリエール。早速ですが契約を始めなさい。」

「えっ、でも人間ですよ！？しかも平民……。」

「契約？」

契約……嫌な予感がするな。

「…やり直しは出来ないんですか？」

「サモン・サーヴァントは神聖な儀式です。残念ですが諦めてください……。」

「…分かりました……。」

何か俺抜きで話が進んでるな……。

「ちょっと…あんた屈みなさいよ。」

「あ？何でd「いいから！！」は、はい……。」

何だよこのガキ……。親の躾がなってねーな。

するとルイズはふぅ…と一息ついた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

「使い魔？」

使い魔って確か…、術者の代わりに些細な用事を代行して、主に伝言・届け物・留守番・偵察・戦闘をする……だっけか？

そう思い出した瞬間ゼラは絶叫する。

「ふざけんなぁぁぁぁ！！」

「きゃあっ！なっ、何！？」

ふざけんな！俺は腐っても魔神だぞ！？使い魔になるなんて俺のプライドが許せん！！

「使い魔なんて絶対なんねぇぞ！！」

「何よ生意気ね！平民のくせに！！」

「落ち着いてミス・ヴァリエール！……あー失礼、ミスター？」

ここの責任者か？なら話は早い！

「おいつるつる！何だよコレ！いきなり使い魔になれなんてよ！！」

「つるつる…！……今このトリステイン魔法学院では現在、使い魔を召喚し契約して自身の魔法属性と専門課程を決める重要な儀式をしています。」

「……それで？」

「この使い魔召喚が出来なければ彼女は……進級出来ません。」

んな事言われたって…、魔神が使い魔になるなんてあり得ねーだろ。

そう思いながらルイズを見ると、彼女は大量の涙を流していた。

「おわっ！？何で泣いてんだよ？」

「うるさい！泣いて…なんか……ない。」

「ゼロのルイズは平民すらも従えねーのかよ！！」

生徒の集団からそんな声が聞こえた。

あー…成る程な。大体分かってきたぞ。

（コイツあんまり魔法使えねーんだな。だからあんな事言われたのかもな…。）

「所詮ゼロのルイズｄ「うるせぇ！」ひっ…！？」

力がないから見下す……。ある意味、人間という生き物が一番悪魔に近いな…。

「テメェらは黙っとけや！潰すぞ！！」

「な、なな何だよ……。」

ゼラは怒りのあまり少し魔力を放ってしまった。

やっべ…ちとやり過ぎたか？まぁ……ガキ共が静かになったから良いか。

「おい…名前何て言うんだっけ？」

「……ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

「長ぇな……ルイズで良いか。俺はゼラってんだ。」

「……。」

「ルイズ、俺は使い魔になる気はない。……今はな。」

「じゃあ…いつなるのよ……？」

『いつなるか』か……、そうだなぁ……。

「お前がそうなるに相応しい人間になったらな。」

そう言うとゼラはルイズの頭をワシワシと撫でる。

「ちょ、ちょっとぉ！？」

「ハハ、可愛い奴だ。」

そうだな……この世界を救う為の相棒に、頑張ってなってもらうか。

こうして、ゼラはルイズの使い魔（仮）となった。そして、この二人の出会いが後々ハルケギニアに多大な影響を与える事を、まだ誰も知る由もなかった。

第二話、魔神召喚（後書き）

次回は主人公紹介をしようと思います。

主人公紹介（前書き）

よくあるキャラになってしまった……。

主人公紹介

【名前】
魔神ゼラ

【性別】
男

【容姿】
茶褐色の髪で髪型はソフトモヒカン。
目付きが鋭いが、精悍な顔つきをしている。
身長は１８０後半である。

【性格】
言葉は少し荒っぽいが、信頼している人物は大切にしようとする。
魔神でありながらも、非人道的な行為はあまり好きではない。（但し、悪人に制裁を加える事もある）
人と馬鹿騒ぎするのが好きである。

【戦闘スタイル】
持ち前の身体能力を生かす戦闘をする。
四肢に魔力を宿して肉弾戦を挑む。
魔力を凝縮させ一気に解き放ったり、ビーム状に放出したりする。

【過去】
ゼラ自身は他人にはあまり過去について触れてほしくない様子である。なのでゼラの過去を知る人物は少なく、少なからずゼラの過去に何かあったようである。
神様に何らかの恩があり、それがゼラの過去に関係しているようで

ある。

主人公紹介（後書き）

意見や感想があれば言ってくださいm（__）m

第三話、悪夢（前書き）

魔神とは思えない温厚さ！！

第三話、悪夢

～ゼラｓｉｄｅ～

今ゼラはルイズの部屋にいた。

「……で、さっきのアレ何なの？」

「あー…アレは……。」

やっぱり魔力を出しちまったのはマズかったな…。

（ごまかすか……。）

「ちょっと？どうなのよ。」

「アレは……手品だ。」

「……はぁ？」

魔力を手品でごまかすなんて初めてだよ…。

「ふーん…変わった手品ね。」

「……。」

ごまかせちゃったよ！コイツ…馬鹿なのか？

「お前って馬鹿なのか？（やっべー！思わず聞いちまった。）」

「なっ、失礼ね！あたしは筆記試験では学年トップよ！！」

ルイズは心を落ち着かせる為に机に置いてあるワインを飲みだした。

「学年トップの優等生が、未成年にも関わらず飲酒して良いのか？」

「何言ってんの？『未成年の飲酒は禁止』なんて法律は無いわよ。」

「マジかよ……。」

未来を担う未成年の体を発達させないつもりか！？

「…ねぇ、あんたって一応使い魔よね？」

「使い魔（仮）だ、間違えんな。」

「何よ（仮）って！……それで、使い魔の仕事分かってるわよね？」

「あぁ、分かってる。」

したくないけど……コイツに約束しちまったからな。

～数時間前～

「わたしが『そうなるに相応しい人間』になったら、本当に使い魔になってくれるんでしょうね？」

「あぁマジだ、大マジだ。」

「もし嘘だったら、……そうね…わたしの使い魔になりなさい！」

「結局使い魔になっちまうじゃねーか！！」

～現在～

「…やるしかねーよな……神様。」

「そうよ、やるしかないの。……眠くなってきたわ、今日は疲れたし…。」

「早く寝ろ、夜更かしは美容の敵だぞ。」

するとルイズは、ゼラがいるにも関わらず制服を脱ぎだした。

「……痴女か？」

「っ！誰がよ！？」

「いやお前だよ、初めて会う男の前で服を脱ぐお前だよ。」

「男…？男なんて何処にいんのよ。」

コイツ……俺が使い魔（仮）だからって。

「それ明日の朝に洗っといて。」

ルイズが脱いだ制服に指を差しながらそう言った。

「……。」

「返事はー？」

「…あいよ……。」

「うん！よろしい。」

これじゃあ家政婦じゃねーかよ……。

そんな風に思っているとルイズがベッドに横たわっていった。それを見たゼラもそれに倣いベッドに横たわった。

「あ、ああああんた何してんのよ！？／／／」

「何だよ…服脱ぐ姿は見せれて一緒にベッドで寝るのは無理なのか？」

「あ、当たり前じゃない！」

何をそんなに怒ってんだよ……。あーそういう事か、

「安心しなガキには欲情しねーよ。」

「…あんたは……床で寝ろぉー！！」

ルイズはそう怒鳴りゼラをベッドから蹴り落とした。

「床で寝るとか…マジかよ……。」

ゼラは不満に思いながら、床の上で徐々に意識を手放した。

～ゼラｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ルイズｓｉｄｅ～

「……寝たかしら。」

ホントにデリカシーの無い奴だったわ……、ちょっとドキドキしち

やったじゃない／／／

「っ！ないないコイツとなんて！！わたしにはワルド様が……。」

そう呟きながらルイズは一人ベッドで悶々としていた。

「…予習しなくちゃ……。」

そう言うとルイズは机に向かい教材を開いた。

明日の授業もノーミスでいくわよ！！

そう奮起しながら勉強をし始めるが――、

「…くぅー……。」

ルイズは見事に夢の中へと堕ちていった。

～ルイズｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

暗い闇の中ゼラは一人その場に佇んでいた。

『痛い…。』

「うるせぇ……。」

『助けてくれ……！』

「うるせぇ！！」

何なんだ…！何なんだよ今さら！！

『ゼラ…お前は酷い奴だ……。』

そう言うとゼラ目の前に、肩まで髪を伸ばした金髪の青年が現れた。

『親友の俺を殺すんだもんな……えげつないよ。』

「うるせぇ…テメェは殺されて当然の事をした！！」

コイツは親友なんかじゃねぇ…！コイツは……！！

『人殺しってか？そんなもん……お前もだろ！！』

「うるせぇぇぇぇ！！！」

ゼラは右手に魔力を宿すと、右手が紫色に発光し始める。

「失せやがれ！！」

魔力が宿った右手で青年を殴り付けるが――――、

『残念当たらない♪だってお前に殺されたからな。』

「チッ…！」

『じゃあな親友、また会おうぜ……。』

「クソッ…！待て！！」

するとゼラの周りある闇が段々と消えていった。

「待ちやがれ！！」

目を覚ますと先ほどまであった闇はなく、机に突っ伏しているルイズが目に入った。

「…はぁ……胸糞悪い夢だった。」

見たくもねー奴の顔見ちまったよ……。

「…にしても……。」

ゼラは立ち上がるとルイズに近づき毛布を掛ける。

「ベッドで寝るんじゃなかったのかよ…。」

全く……昔の俺だったらこんな事絶対しねーぞ？

そう思うと昨夜ルイズが脱いだ制服が目に入る。

『それ明日の朝に洗っといて。』

「…仕方ねぇ。」

ゼラは手近にあった桶に制服を入れると窓から外へ出ていった。

第三話、悪夢（後書き）

ゼラの過去を書くのは骨が折れそうです……。

第四話、魔法学院の乙女達（前書き）

題名通りの内容です。

第四話、魔法学院の乙女達

〜？ｓｉｄｅ〜

「ふぅ…今日も多いなぁ。」

今、篭にたくさんの洗濯物を入れているこの少女は洗濯場へと移動している最中であった。

「あと…もう少し……。」

少女は重い洗濯物を苦労しながらもゆっくりと運んでいた。だが――、

『ズドン！！』

何かが落下して来た。その影響で少女はバランスを崩してしまう。

「きゃあっ！」

嘘ぉ…せっかくここまで運んだのに～。

少女は自分が倒れるのを覚悟したが、

「……あれ、倒れない？」

「おーい平気か？」

少女はいつの間にいた青年によって支えられていた。

「いやー悪い！人がいるとは思わなくて。」

「えっ！？じゃあさっき降って来たのって……。」

「あぁ、それ俺だわ。」

それを聞いた少女は口を開けてポカーンとしていたが、

「あっ！洗濯物！！」

「安心しろ、全部あそこだ。」

青年が指差す方向には、飛び散ったハズの洗濯物が綺麗に重ねて置いてあった。

丁寧に畳んである……、まさかコレも？

「おーい、ホントに大丈夫か？」

「あっ…はい平気です。」

「そいつは良かった。…あっ、悪いけどここ洗濯場とかない？案内してくんねーかな？」

「洗濯場ならありますよ、こちらです。」

悪い人ではなさそうだなぁ……。

「紹介が遅れたな、俺はゼラってんだ。」

「ゼラさんですか。私はシエスタと申します。」

互いの名前を交わした二人は洗濯場へと移動した。

～シエスタｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

危なかった……、一時はどうなるかと思ったぜ。

ゼラは先ほどの出来事に冷や汗を流していた。

「あのー…、もしかしてゼラさんってミス・ヴァリエールの使い魔さんですよね？」

「正しくは使い魔（仮）だ、…よく知ってんな。」

「学院中で噂になってますよ？『ゼロのルイズが謎の平民を召喚した』って。」

『謎』ってなんだよ。…大方、魔力を出したのが原因だろうがな。

そんな風に談笑していると洗濯場らしき場所へと辿り着いた。

「ここが洗濯場です。」

「おっ、着いたのか。サンキューな。」

「サンキュー…？」

その言葉にシエスタは首を傾げる。その動作にゼラは、

（可愛い…、これが人間界で流行っている『萌え』ってやつか。）

ゼラは偶に人間界を覗く事があるので、そういう関連の知識はある程度ある。

「サンキューって言うのはな……、ありがとうって意味だよ。」

「へぇ～そうなんですか。」

二人は会話もそこそこにし、早速洗濯へと取り掛かった。

「…上手く出来ねぇ……。」

クッソ…何だよコレ？スゲー洗い辛いぞ。

「…もし良ければ私が洗いましょうか？」

「マジでか！？いや～助かるぜ。」

「いえ、いいんですよ。コレも仕事ですから。」

「若いのに頑張るねぇ…。」

「ふふっ…ゼラさんもお若いじゃないですか。」

お若いねぇ……、『こんなナリしてるけど実は１０００年以上生きてまーす』何ていえねーよなぁ…。

そうこうしていると洗濯は終わっており、二人は学院の方へ歩き出していた。

「では私はこれで…。」

「サンキューなシエスタ、この礼はキチンと返すぜ。」

「ふふっ…では失礼します。」

そう言うとシエスタはゼラとは別の道を歩いて行った。

「良い女だ…ああいうのを嫁にするべきだよな。」

そう言うとゼラはルイズの部屋へと帰ろうとした。が――――、

「部屋分かんねぇ……。」

その後ゼラは、偶々廊下で出会った女子生徒にルイズの部屋まで案内してもらった。

～ゼラｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？ｓｉｄｅ～

『ズドン！！』

その音に私は目が覚めた。何故朝からあんな爆発音が？

その目の覚ました少女……タバサは、近くに置いてあった眼鏡を掛けるとすぐさま身支度を始めた。

制服のボタンを締めているいる途中、ふと昨日の使い魔召喚の事を思い出す。

「あの人……。」

『テメェらは黙っとけや！潰すぞ！！』

あの人がそう怒鳴った瞬間、何かが体を襲って来たような感覚がした……。

タバサは昨日ルイズが召喚した平民らしき人物について考察していたが、

「…別にいいか……。」

私の邪魔にならなければ探る必要もないだろう……。

そう思ったタバサは最後のボタンを締め、マントを着て自分より長い杖を持つと部屋を出て行った。

しばらく一人で廊下を歩いていると、

「おーい、そこの青髪のお嬢ちゃん。」

後ろから呼び止められる声がしたので振り返ってみる。そこにいたのは、

「君ルイズの部屋知ってるか？案内してくんねーかな。」

あのルイズ謎の使い魔であった。いきなりの事でタバサは少し混乱していたが、

「こっち……。」

「おっ、案内してくれんのか。」

タバサはその謎の使い魔をルイズの部屋へと案内する事にした。

（……彼は一体何者？）

おそらくただの平民ではない……。もしかして貴族？

「つか広いなこの学校は。」

「……。」

「もしもーし…？」

「…あなたは……。」

「？」

「あなたは何者？」

タバサは敵の可能性もある人物に、どストレートに聞いてしまった。

～タバサｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

「あなたは何者？」

このお嬢ちゃん……やっぱり普通の学生じゃなかったな。

ゼラ自身もタバサに対して不信感を持っていた。

「……知りたいか？」

「えぇ…。」

「俺はなぁ……。」

するとゼラは両手を大きく広げこう叫んだ。

「俺は旅芸人だ！！」

「……。」

俺は学年トップを騙す事が出来た男！このお嬢ちゃんも騙せるハ

ズだ！！

「本当は？」

ダメでした（笑）。……こうなったら！

「いやホントに旅芸人だ。」

ゼラは嘘を突き通す事にした。

「本当の事言って……！」

「ホントだよ！！」

その後も二人は言い争っていたが、

「ちょっとぉ～、朝から何なの？」

そう聞こえたかと思うと、後ろのドアが開いた。

「あらタバサじゃない、…その人誰？」

部屋から出て来たその少女は、燃えるような赤い髪を生やしていた。

「あら、ルイズが召喚した平民じゃない。」

赤髪の少女はゼラに近付くと、品定めするかのようにゼラを見る。

「あら…結構男前じゃない。」

「あぁ…そういうお前も良い女だ……。」

ゼラは思わず赤髪の少女の二つの丘陵に目が言ってしまう。

ホントに学生か？色気あり過ぎだろ……。

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。気軽にキュルケって呼んで。それと、こっちにいるのがタバサよ。」

「タバサって言うのか、俺はゼラだ。」

二人がそう自己紹介すると、キュルケが何かを思い出したかのような顔をした。

「そう言えばあなた達何を騒いでいたの？」

「この人g「ルイズの部屋の場所聞いてたんだよ！」……。」

危ねぇ……、これ以上怪しまれてたまるか。

「ルイズの部屋探してたの？それならすぐ横よ。」

「え〝っ？」

マジかよ…、だったらすぐ逃げれば良かった……。

「サンキューな…、それじゃあ。」

そう言うとゼラはルイズの部屋へと入って行った。

「…ねぇタバサ、『サンキュー』って何？」

「知らない……。」

その場に残った二人は、しばらくの間『サンキュー』について談議する事となった。

第四話、魔法学院の乙女達（後書き）

ヒロインは誰にしようかな…？

ちなみに作者はマチルダの姐さんが好きです。

第五話、早く相棒に……（前書き）

この魔神優しすぎる。

第五話、早く相棒に……

～ゼラｓｉｄｅ～

「起きろルイズ、朝だぞ。」

「うぅ～ん…ムニャムニャ……。」

爆睡じゃねーか。机に涎垂らしてるし……。

「…もう……食べられにゃい……。」

「マンガかよ。」

仕方ねぇな、無理やり起こすか。

「起きろ！！！」

「きゃあ！な、何事！？」

「やっと起きたか、この眠り姫が。」

「びっくりしたじゃない！もうちょっと起こし方考えなさいよ！！」

ホントにうるせぇな……、タバサって子と大違いだな。

そんな事を思っているとゼラの腹の音が鳴る。

「んな事より腹減ったよ、朝飯は？」

「ちょっと待ってなさい。今着替えるから。」

ルイズはそう言うとまた服を脱ぎだす。

「……痴女……。」

「う、うるさい！！」

二人はその後も言い争いながらも身なりを整え食堂へと向かった。

～食堂～

食堂には既に多くの生徒が朝食を食べに来ていた。

「広いな…。というか無駄な装飾あり過ぎ。」

「何言ってんの？貴族の学校だから当たり前じゃない。」

「そうかよ……。」

こんなんに金使わずにもっと公共施設を増やせよ…。

「おい…アレ……。」

「謎の平民だ…。」

「何でこの食堂に入って来てんだよ……。」

あちこちからそんな声が聞こえる。

「…歓迎されてねぇらしいな。」

「仕方ないわよ、ここに入れるのは貴族と学院で使役している平民だけなの。」

「ふーん……。」

そんな会話をしながらルイズは隅の壁に指を差した。

「ちなみに、あんたの席はあっちよ。」

そこはスープが入った皿とパンだけが置いてあった。

「……マジ？」

「あのねぇ…、ホントだったら平民がこの食堂に入る事は出来ないの。」

「いやだからってアレだけかよ！」

毎日アレだけしか栄養摂取出来ないとか死んじまうわ！

「仕方ないわね、コレあげるわ。」

ルイズはそう言うと、自分の朝食のスープに入っていた鶏肉を一つ差し出す。

「ほらあげる。」

ゼラはルイズの行動に呆気に取られていたが、

「…外で食ってくるよ。」

ゼラはパンだけを握りしめ食堂を後にした。

「相棒には程遠いな……。」

まぁ気長に待つとするかな…。

ゼラは食堂の入口付近でパンを齧りつつ、ルイズを待つ事にした。

～ゼラｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ルイズｓｉｄｅ～

「何よ…別に怒らなくてもいいじゃない。」

何も出ていく事はないじゃない……。

しかしルイズは先ほどの行動を少し後悔していた。

「昼食は用意してあげよ……。」

「はぁ～いルイズ…あら？愛しの彼は？」

「何の用…キュルケ……。」

「別に、あなたの事だからゼラを家畜同然に扱ってると思って。」

ゼラと言う名前を聞いた時、ピタリとスプーンを止めた。

「アイツの事知ってんの？」

「今朝会ったのよ、彼…優しそうな人じゃない。」

「ちょっと！？あたしの使い魔に手を出したら許さないわよ！」

この女…ホント見境なしね……。

「彼は使い魔である以前に人間よ、あんまり度がすぎると愛想尽かされるわよ。」

「分かってるわよ…そんな事。」

ルイズはまだ朝食が残っているにも関わらず席を立ち、食堂から出て行った。

「頑固な子ね……。」

キュルケは呆れながらぼそりと呟いた。

～ルイズｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

ゼラ達は授業が始まる教室へと移動していた。

「この学校ってやっぱり魔法の授業するのか？」

「そうよ、一人前の貴族になる為に日々魔法を磨いているの。」

「お前も早く成長してくれよ～？」

「うっ…、分かってわよ。」

しばらくすると、生徒が大勢いる教室へと着いた。

しかし、同時に食堂で聞いた罵倒がまた聞こえた。

「…泣いてやろうかな。」

「お願いだからやめて。恥ずかしいから…。」

まぁ所詮はガキ共の戯言だな。気にする事じゃない。

そう思っていると、教壇に少しふくよかな中年女性が現れる。

「みなさん、春の使い魔召喚は大成功のようですね。この赤土のシュヴルーズ、春の新学期に様々な使い魔たちを見るのが、毎年の楽しみです。」

あのオバハンが教師か…。しかし、『赤土』とは変わった二つ名だな。

「あら……中々変わった使い魔を召喚したようですね。ミス・ヴァリエール。」

「使い魔召喚が出来ないからって平民を雇っただけだろ！ゼロのルイズ！！」

「ち、違うわ！ちゃんと召喚したもん！」

「だとしても！平民を召喚するなんてやっぱりゼロｎ『ザクッ！』…ひっ、ひぃ！」

「黙っとけ。」

何とゼラは男子生徒の机めがけて羽ペンを放ったのだ。

「な、なな何するんだ！？ゼロのルイズの使い魔のくせに！！」

「この野郎…まだ言うか！！」

このガキには少しお灸をすえてやるとするか……。

するとゼラは固定化の魔法が施されている机を難なく持ち上げる。

「マ、マジかよ！！？」

「誰かあの平民を止めろ！」

「ちょ、ちょっと落ち着きなさい！」

ルイズがゼラを止めた事で騒ぎは沈静化されたが、ゼラは退室命令を出された。

「あーぁ、やり過ぎたかな……。」

ちょっとインパクトが強すぎたか？

ゼラが反省していると、教室からタバサが出て来た。

「おっ、タバサか。授業終わったのか？」

「まだ…。」

「じゃあ……サボりか？」

「違う…避難しただけ。」

「避難？」

避難って…なんかヤバい事でも起きんのか？

「…聞きたいk『ドカァーン！！』…。」

「何だ！？」

ゼラが教室に戻ると、その光景は正に地獄絵図であった。

「きゃー！私のチャッピーが！！」

「俺のダニーを食うな！」

「マイルズ！そいつを吐き出せ、腹壊すぞ！！」

ひでぇな…、誰の仕業だ？

ふと教壇を見るとシュヴルーズがピクピクと気絶をし、ルイズはボロボロになりながら艶めかしい格好になっていた。

ルイズがやったのか？だとしたら…中々の威力だな。

「…ちょっと失敗したわね。」

「ちょっとじゃないだろ！いい加減にしろよゼロのルイズ！！」

「いつになったら魔法を成功させるんだよ！！」

成る程な……。魔法成功率がゼロ、だからゼロのルイズか。

その後意識を取り戻したシュヴルーズは、ルイズに教室の掃除をする事を伝えた。

第五話、早く相棒に……（後書き）

次回いよいよ初戦闘かな？

第六話、二股男の逆ギレ（前書き）

戦闘になりませんでした（・ω・、）

第六話、二股男の逆ギレ

～ルイズｓｉｄｅ～

ルイズとゼラは、先ほどの授業で残骸だらけになった教室の掃除をしていた。

「……。」

「……。」

わたし何やってんだろ……。これじゃあ、いつになっても使い魔になってもらえないじゃない……。

ルイズがそんな事を思っていると、キュルケのあの言葉を思い出した。

『愛想尽かされるわよ。』

そんなの絶対に嫌よ…。でも……コイツもしかしたら。

「ね、ねぇ……。」

「ん？どうした？」

「あたしの事…見損なったでしょ？」

「……。」

この反応だと当たりのようね…。仕方ないわよね、ゼロのルイズなんて言われてるんだし……。

そう悲観していると頭に何かが乗るのを感じた。見上げてみると、

「そんな事思ってねーよ。だから…安心しな。」

そう言うとゼラはルイズの頭を撫でた。

しかし、ルイズはその事より一つの疑問で頭がいっぱいであった。

「何でよ…？あたしは…あんたにひどい事したのよ？」

「昼飯の事か？別に気にしてねぇよ。」

どうして…？普通の奴だったら見捨てるわよ？

「それにな…俺は努力してる奴を見捨てる程、鬼畜じゃない。お前は寝る間も惜しんで勉強してただろ。」

「…知ってたの？」

「まぁな。それに魔法が使えないんなら練習あるのみだ！俺も手伝ってやるよ。」

ゼラのその言葉にルイズは震えていた。それは怒っているからではなく――――、

「ひっぐ…！…うぅ……。」

そうルイズは泣いていたのだ。学園に来てからこんなに励まされたのはゼラが初めてであるからだ。

「まぁ…人間たまには泣いてスッキリする時が必要だ。……お前の成長楽しみにしてるぜ、ルイズ。」

ゼラはそう言うと、綺麗に片付かれた教室から出て行った。

「……よし、やってやろうじゃない！わたしやアイツの為にも絶対

に魔法を使えるようになるわ！！」

そして…！アイツを絶対わたしの使い魔にするわ！！

～ルイズｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

「はふ…！はふ…はふ！！」

「ふふ…おかわりならありますよゼラさん。」

「悪いなシエスタ！いや～にしても旨いなコレ。」

「ありがとうございます、マルトーコック長も喜びますよ。」

そう今ゼラはシエスタに賄い料理を分けてもらっているのだ。

あの朝飯の様子じゃあ昼飯は絶望的だからな。シエスタに助けてもらって正解だった…。

しかしゼラは知らなかった。ルイズが貴族の料理をゼラの分まで作るように頼んでいた事を……。

「飯食わせてもらった礼だ、何か手伝うよ。」

「良いんですか…？」

「気にすんなって！ほら、何かねぇの？」

「では…ケーキの配膳をお願い出来ますか？」

配膳か…。初めてだがやってみるか。

「おぅ、任しとけ。」

ゼラはトレイに並んだケーキを渡され生徒達のいる方へ向かった。

「ケーキいかがっスか～？」

「そこの給仕、一つくれ。」

「へいへい。」

「…何だその言葉遣いは。」

「いいから早く食べちゃいなさい。洗い物が溜まるでしょ！」

「どこのお母さんだ！？」

男子生徒と漫才していると、後ろから怒鳴り声が聞こえた。

「何だ一体？」

「待てお母さ…じゃなくて給仕！」

ゼラはその言葉を無視し騒ぎになっている方へ向かって行く。

「どうしてくれるんだね！？」

「申し訳ありません…！申し訳ありません！！」

「シエスタじゃねぇか……。」

ゼラは一体何が起きたのか近くの生徒に聞いてみた。

どうやら少年が落とした香水をシエスタが拾い、それを渡したら二股がバレたらしい。

その二股がバレたのをシエスタのせいにしてるのか？

「くっだらねぇ……。」

ゼラはそう言うとシエスタに近付く。

「行くぞシエスタ、こんなガキ相手にすんな。」

「ゼラさん！？」

「ガ、ガキだと！何だね君は！？」

「誰でも良いだろ。そもそも…お前みたいな童貞が二股なんて１００年早ぇよ。」

「ど、童貞ちゃうわ！！」

『童貞』という単語に動揺した少年だが、ゼラの顔を見ると態度を一変した。

「誰かと思えば…ゼロのルイズの使い魔じゃないか。主人同様、品性の欠片もないね。」

「…ルイズは関係ねぇだろ。」

「まぁ所詮ゼロのルイズが召喚した奴だ…。仕方ないか。」

「てめぇ！！」

上等だよくそガキ…。その腐った性根叩き治してやる！！

「悔しいかい？では…決闘をしようじゃないか！」

「良いぜ…後悔すんなよ。」

二人は見えない闘気をだしながらその場を後にした。

～ゼラｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ルイズｓｉｄｅ～

「どうしよう！？私のせいでゼラさんが……！」

「ちょっと一体何が起きたのよ？」

シエスタに近付いたルイズが問いただす。

「ミ、ミス・ヴァリエール～！！」

「な、何！？どうしたのよ！？」

シエスタがルイズに先ほどの騒動を教える。

「あんの馬鹿犬…！何してんのよ！！」

いくらアイツだって貴族に勝てる訳ないじゃない！

「申し訳ありません！ミス・ヴァリエール！」

「あなた何も悪くないわ、それよりこの事を先生に報告して！」

「は、はい！」

「あたしはアイツの後を追うわ！」

全く…！あの馬鹿犬は！！

ルイズは決闘をするであろう場所へと走って行った。

第六話、二股男の逆ギレ（後書き）

次回はホントに戦闘です！

第七話、使い魔（仮）の実力（前書き）

魔神さんの初戦闘です。

第七話、使い魔（仮）の実力

～ゼラｓｉｄｅ～

「諸君！決闘だ！！」

少年のその言葉に、ヴェストリの広場に集まったギャラリーが歓声をあげる。

「逃げずに来た事を褒めてあげようじゃないか。」

「うるせぇくそガキ、さっさと来な。」

「ぐっ…！良いだろう！」

少年が薔薇の造花がついた杖を振ると、西洋鎧が現れた。

土を媒体に作ったのか？……にしてもセンスないな。

「僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ！従って…このワルキューレがお相手するよ。」

「そんな柔らかそうな奴で良いのか？」

「…いい気になるなよ！」

ワルキューレがゼラに突撃しようした矢先、

「ちょっと待ちなさい！！」

「ルイズか。飯は食い終わったか？」

「そんな事どうでもいいわよ！早くアイツに謝りなさい！」

「謝る？」

謝る訳ないだろ、だってあのガキは……。

「あのガキはお前を馬鹿にした。謝罪する義理はねぇ。」

「えっ……？」

「そういう事だ……安心しな絶対勝つからよ。何せ俺は謎の旅芸人だからな。」

そう言うとギーシュのいる方に体を向ける。

「さぁ準備は良いぜ。」

「後悔するなよ！行けワルキューレ！！」

ワルキューレが全速力でゼラに突撃する。

～ゼラｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ルイズｓｉｄｅ～

「逃げてっ！！」

あんたが貴族に勝てる訳ないじゃない！だから…早く逃げて！！

しかしルイズの思いとは裏腹に、ワルキューレの拳がゼラにヒットする。

「追撃だワルキューレ！！」

「お願いやめて！」

ルイズが止めに向かったが、

「待ちなさいルイズ。」

「キュルケ！？何よあんた見捨てる気なの！」

「落ち着きなさいな…、彼をよく見てみなさい。」

その言葉にルイズは正直に従いゼラを見てみる。すると――――、

「嘘……笑ってる……。」

何で笑っていられるのよ！？余裕の笑みみたいなもの漏らしちゃって！！

そう思っているとルイズはもう一つある事に気付く。

「あの場から一歩も動いてない……。」

嘘よ…普通の人間だったら吹き飛ばされるのに……。

ギャラリーは気付いていないがルイズ・キュルケ・タバサはゼラの異常さに気付いていた。

そして気付いてみれば、

「おい…あの平民何で倒れないんだよ…？」

「青銅だぞ！？常人なら数発で終わりなのに！」

ギャラリーも事の重大さに気付き始める。

「何故なんだ！？何故倒れない！！」

「簡単な事だよ。お前のお人形さんの攻撃は……痛くも痒くもないんだよ！」

ゼラの迫力に周りにいたギャラリーが恐怖を覚える。

「ルイズよーく見とけ。今から見せるのが、お前が召喚した者の力だ。」

ゼラはそう言うと、ワルキューレに向かって足を振り上げ――――、

「うらぁ！！」

ゼラがワルキューレの頭に踵落としをすると、ワルキューレはまるで熱々のナイフで裂かれたバターのように左右に泣き別れになる。

「「「「「「！！！？」」」」」」

その光景にゼラ以外の人間が唖然とする。

「嘘……。」

アイツ…あんなに強かったの？

ルイズは驚いた反面、自分の召喚した使い魔（仮）の強さに嬉しさを感じた。

～ルイズｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

「さぁ…行くぜぇ！」

途端にゼラの四肢が紫色に発光した。これはゼラが戦闘モードに入った事を意味した。

「ぐっ……1体倒した程度で調子に乗るなぁ！！」

ギーシュが6体のワルキューレ精製し、その内5体を突撃させる。

「今度のワルキューレは武器を持っている！さっきのようにはいかないぞ！！」

武器持ったって意味ねぇよ…。さっきの1体目で気付くんだったな。

ゼラは右手を力任せに振るった。すると振った力の影響により衝撃波が生み出された。

そうするとワルキューレに衝撃波がぶち当たり粉々になっていく。

「そ、そんな馬鹿な…！」

「残り1体…。」

ゼラがそう呟くとギーシュのを守っているワルキューレに近付く。

「ワ、ワルキューレ！僕を守ｒ『バシュン！！』な、何ぃ！？」

盾を持っていたハズのワルキューレは何故か下半身だけとなっていた。

ゼラが魔力をビーム状に放ち、ワルキューレの上半身を消し飛ばしたのだ。

ちょっと力を出し過ぎたか？…まぁ、このギーシュってガキには良い薬になるな。

そう考えるとゼラはギーシュに近付いて行った。

～ゼラside　out～

～ギーシュside～

もうダメだ……自分の武器であるワルキューレがいとも簡単に……。

「ぼ…僕の…負けだ……。」

「負けを認めるんだな？」

「あぁ…認めるよ。」

「そうか…じゃあ死　ぬ　か？」

えっ…？何を言ってるんだこの男は！？何故僕が死ななければならない！？

「な、何で僕を殺すんだい…？」

「決闘とは本来生命を賭して戦う事だ。そして決闘を終わらせる為には……。」

ゼラがギーシュを肉食獣がエサをを狙うかのような目で見る。

「どちらか一方が死ぬまで決闘は終わらない。そして…敗者はお前だよ。」

「待ってくれ！何も殺す事はないだろう！？」

まさか本気なのか！？自分は遊び半分でやっただけなのに！

「何だよ…貴族っていうのはこんな腰抜け野郎ばっかりかよ。」

「っ！貴族を侮辱したな！」

許さん！平民が貴族を侮辱するなんて！！

「自分は貴族だと言うのなら受け入れるんだな。自分の罰に。」

「そ、それは……。」

確かに…。貴族というものは高貴な精神を持っているものだ。なのに今の僕ときたらまるで……。

「何て惨めな人間なんだ……。」

このままでは貴族として…いや男として恥だな……。

「分かった…殺してくれ。覚悟は出来た。」

ギーシュはそう言うと杖を投げ捨てた。その行動に周りのギャラリーに緊張が走る。

「……。」

ギーシュの行動を見たゼラは無言で近付く。

（さよならモンモランシー…。大好きだったよ。）

ギーシュが最愛の人物に最後になるであろう告白をすると、静かに目を瞑った。

「…大した奴だよお前は！」

ゼラはそう嬉しそうに言うとギーシュの肩にポンと手を置いた。

「……へ？」

「中々根性あるな！スゲー気に入ったぜ！！」

ゼラはそう言うと満面の笑みでギーシュを笑いかける。

「「「「「「ど、どういう事だ（い）？」」」」」」

ギーシュの思っている事がその場にいる全員とシンクロしていた。

～ギーシュｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ゼラｓｉｄｅ～

「悪いな、お前を試したんだわ。」

「えっ！？」

驚いてんなー…。まっ、仕方ねぇよな。

「ハナから殺す気なんてなかったよ。」

「そ、そうだったのか。」

「まぁな…で？どうだ気分は。」

「騙されて悔しいけど…それ以上に心が清々しいよ。」

「そうかよ。」

どうやら、何かしら吹っ切れたみたいだな。

「しかし！お前にはやらねぇといけない事がある。……分かるな？」

「ルイズと給仕の子に謝罪するよ。誠心誠意ね。」

上出来だ……。やっぱり人間ってのは素晴らしいな。

「まぁ謝罪は後だ！今から飲みに行くぞ！！」

「えぇっ、何で！！？」

「喧嘩の後の仲直りの儀式みたいなもんだよ。さっ、行くぞぉ！」

「そ、そうだね！よし今日は酔い潰れるぞ！！」

二人は笑い合いながらヴェストリの広場を後にした。

「「「「「な、何だったんだ……？」」」」」

その場に残された他の貴族達はそのように呟いた。

第七話、使い魔（仮）の実力（後書き）

少し強くしすぎたかな？

まぁ…魔神だからゼラはディスガイアのキャラ並に強いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8603z/

ゼロの魔神

2012年1月6日02時50分発行